

2026年度 所信表明

研究総主幹 吉田 哲也

昨年度の所信表明において、私は次の2点を強く意識すべきであると述べました。

第1に、宇宙科学研究所は国立研究開発法人に属する学術研究組織であり、その制度的枠組みの中で学術研究を遂行しているという点です。

第2に、我々は日本の宇宙科学を推進する大学共同利用の担い手であり、この枠組みを最大限に活用することで、「研究と教育」を主目的とする大学とは異なる、宇宙科学研究所ならではの存在意義、すなわち「宇宙科学ミッションの実行」を実現できるという点です。

これら2点を踏まえ、「宇宙科学研究所だからできる学術研究」「宇宙科学研究所だからできる人材育成」「宇宙科学研究所だからできる大学院教育」を明確化し、「宇宙科学研究所だからできる」ことそのものを、宇宙科学研究所の大きな魅力として打ち出していきたいと述べました。

この「2点の意識」に基づき、宇宙科学コミュニティの要である宇宙理学委員会および宇宙工学委員会に対しては、ステアリング・コミッティとしての役割をより強く意識していただき、「宇宙科学の全体最適化」を図る中心的存在となることをお願いしてきました。その上で、宇宙科学研究所とコミュニティが並走し、予見可能で魅力ある将来像を共に描く取り組みを進めてきました。併せて、宇宙科学シンポジウムの刷新などを通じ、理学と工学が一体となって将来のブルーオーシャンを切り拓く活動を、若手研究者とともに始動させています。

2026年度は、これらの議論と準備を踏まえ、いよいよ「宇宙科学研究所だからできる」を宇宙科学研究所の魅力として具現化する取り組みを本格的に開始する年度となります。なかでも、「宇宙科学研究所だからできる人材育成」と「宇宙科学研究所だからできる大学院教育」を重視します。

「宇宙科学ミッションを実現できる人材」、そして「宇宙科学ミッションの実現の過程や考え方を理解している人材」は、宇宙科学研究所内部にとどまらず、宇宙科学に携わる大学や広範なコミュニティにおいて強く求められる存在であるはずで、こうした人材を、宇宙科学研究所で実際に遂行されている宇宙科学ミッションの現場で育成することにより、「宇宙科学研究所とコミュニティの並走」および「理工一体となったブルーオーシャンの開拓」を、より実質的かつ強固なものとしていきたいと考えています。